

# 小学校からの観光基礎教育のモデル授業構築に関する研究 ——沖縄県を事例に——

寺本 潔<sup>1)</sup>, 中嶋真美<sup>2)</sup>, 曾山 毅<sup>3)</sup>, 中村 哲<sup>3)</sup>, 小林 亮<sup>4)</sup>

## Research in the case of Okinawa Prefecture about Model Class Building of the Tourist Foundation Education from the Elementary School

Kiyoshi Teramoto<sup>1)</sup>, Mami Nakajima<sup>2)</sup>, Takeshi Soyama<sup>3)</sup>, Tetsu Nakamura<sup>3)</sup> and Makoto Kobayashi<sup>4)</sup>

Tamagawa University Research Institute, Machida-shi, Tokyo, 194-8610 Japan.  
*Tamagawa University Research Review*, 21, 1-18 (2015)

### Abstract

Tourist foundation education is learning of understanding an area. We made the subject to learn Okinawa Prefecture in this research. The subject for a child to learn the world heritage was made. There is effect which suggests child's area understanding in the tourist education. The class of the social studies which made sightseeing a theme in the near future will be necessary from the elementary school.

キーワード：観光基礎教育, エコツーリズム, 国際通り

Keywords: tourist foundation education, ecotourism, Kokusai Douri

## 1. はじめに

訪日外国人の数が1900万人を超えた。政府は、2020年までにさらに高い目標を掲げている。また、国内では北陸新幹線も開通した。その結果、金沢を代表とした和風の文化が日本人、外国人問わず観光客の人気を集めている。古民家、和食、着物、和菓子、富士山、温泉、祭り等の伝統文化はもちろん、日本車を産み出す自動車工場や安全で味深い食品を作る工場を観る産業観光、キャラクター・漫画・アニメ・フィギュア・コスプレ等のサブカルチャーも観光客の注目の的である。国内旅行に目を転じてみると富岡製糸場や端島（軍艦島）を始め近代産業遺産にも注目が集まりつつある。もちろん、代表的

な観光地である京都・奈良の街並み・文化財、北海道や沖縄県の自然美、小京都である萩・高山等もさらに人気を集めていくだろう。これらの動きを教育界でも活かし教師たちは観光の教育力に強い関心を抱き、将来の観光人材の卵である子どもたちに「観光のまなごし」を育成すべきではないか。観光教育は、商業科の高等学校や大学の観光学部、社会人向けの専門学校を除けば、未だ我が国においては市民権を得ているとは言い難い。しかし、観光に寄せられた社会からの期待は大きく、今後の観光産業や地域の振興に携わる人材育成、来訪の観光客（インバウンド）向けホスピタリティ育成などを基盤で支える教育が重要性を増している。いわば観光を通して獲得する新しい資質が国民に求められており、初等教育段階

1) 玉川大学教育学部教育学科

2) 玉川大学文学部英語教育学科

3) 玉川大学観光学部観光学科

4) 玉川大学教育学部乳幼児発達学科

からの観光基礎教育が早急に構築される必要がある。本研究は、観光学部と教育学部が同居する国内唯一の私立大学（玉川大学）の特性を生かし、両学部の境界領域である観光基礎教育のモデルとなる授業を教育実践的に構築できると考えたことに研究の動機がある。観光学部と教育学部との各々の特性を生かしつつ、観光の教育力に関する共同研究を推進することとした。以下に学部間共同研究で推進した研究を報告したい。

## 2. 観光基礎教育の必要性

### 2.1 観光基礎教育の視点

例えば、グリーン・ツーリズムという観光がある。都市から農漁村に出かける滞在型の旅である。受け入れが成功している地域では、人と接することに長けた人材が多く住んでいる。人と多くは接触しない農・漁業とは180度対極に位置する観光産業であるが、農漁村こそ人を呼び込む努力が欠かせない。地方創生のためにも、その担い手を教育で育成することが急務である。同時に真っ先に取り組まなくてはならないのは、地域に存在する資源の再発見や資源を考える教材化である。小学3・4年の社会科単元「ものを生産する仕事」「ものを売る商店の工夫」「昔から受け継ぐ年中行事」「わたしたちの県の特産品」「外国とつながる地域」は、いずれも観光を内容理解に介在させた方が前向きになる。5年単元「暮らしを支える情報」「環境を守る」も観光情報やエコツーリズムを扱える。

1例をあげよう。下の表は、農漁村地域で発見できる資源とその観光教育的価値を整理したものである。つまり、観光という懐中電灯で地域を照らすことで、地域資源が観光化してくる、いわば資源を観るまなざしを獲得できるようになる。

表1 農漁村で発見できる資源とその観光教育的な価値

地域にある資源	具体的な要素（学習材）	観光教育的な価値
田園・里海景観	灌漑水路、屋敷林、棚田、浜と魚付林	故郷、癒し、くつろぎ
伝統的な建造物	神社、古民家、散居村、防風石垣	レトロ、素朴さ、本物
お祭りや年中行事	収穫祭、鳥追い、どんど焼き、海神祭	受け継ぐ意識、人手
安心安全な食	郷土料理、沿岸の海の幸、特産品	食育、土・海とのつながり
農漁村の生活	有機農業、生活リズム、地場産業	健康、自然の恵みへの感謝
新しい農業・漁業	ガーデニング、ハーブ園、栽培漁業	西洋の趣味、都市交流

### 2.2 研究内容の特徴や意義

来訪者を迎えるインバウンド観光は、いわゆる着地型観光をはじめ、今後の日本における観光振興策の重要なテーマである。観光地である当該住民の観光に関する知識や態度の育成こそ、成熟した観光地には不可欠である。観光と教育は、人間形成の観点から親和性が高く、とりわけ観光ホスピタリティ教育は、地域資源の理解促進、他者への共感的理解、環境倫理など小学校から開始されるに値する分野である。観光立県で有名な沖縄県においては年間の来訪者が700万人と多く、国内でも総合第一位の人気を誇る観光立県である（『じゃらん』の調査による）。そのため沖縄県では、観光コンベンションビューロを中心に、沖縄県内の全小学4年生児童に向けて『めんそーれー観光学習』という48頁の副読本が現場の教員と共編で作成・配布されている。しかし、残念なことに副読本の教育現場での活用度は未だ不十分であり沖縄県が持つ観光資源の価値が見出され、観光人材育成に向けて活用されていない。

小学校段階からのインバウンド観光基礎教育の一層の進展を期待する筆者らのグループは、この問題に対し有益な知識と有効な解決策を有していた。代表者の寺本（教育学部）は過去4年間琉球大学教育学部附属小学校において社会科授業を指導助言し、意欲的な観光単元授業の開発に成功している。

また、中村（観光学部）は琉球大学観光産業科学部において非常勤講師を務め、曾山（観光学部）は、前勤務校が沖縄県名護市にある名桜大学観光学部であり、両氏は沖縄県の観光事情に詳しい。小林（教育学部）はESD（持続発展教育）の専門家であり、教育学部のユネスコスクール認定に尽力しており、持続可能な開発と観光に関するテーマに関心を持っている（申請後、小林は米国での在外研究に行くことになり、当地から情報を頂

くことにした)。さらに中嶋（文学部）は、エコツーリズムによる地域振興を専門としており、沖縄島北部の自然をテーマにしたエコツーリズム教材の開発に寄与できる。これら5名の共同研究者による教育実践的な研究を通して、我が国では未だ皆無に近い、小学校における観光基礎教育のモデル授業を構想した。

### 2.3 研究の方法

大きく分けて二つの研究方法を採用した。第一は、観光基礎教育の実態把握である。まず、沖縄コンベンションビューロへの取材・ヒアリングを実施し、県内におけるインバウンド観光基礎教育の実態を把握した。さらに、県内の公立小学校200校を抽出し、観光基礎教育の状況や前述した『観光学習』副読本の活用状況に関して郵送によるアンケート調査を実施した。その結果の詳細は別の報告で行いたいが、約3割の小学校において副読本の未使用が明らかとなった。観光立県であるにも関わらず未だ沖縄県でさえ、観光を題材にした公教育は低調であることが判明した。

第二には、寺本が指導助言した琉球大学教育学部附属小学校の山内教諭が現在勤務する中城村中城南小学校に研究協力を依頼し、筆者らの研究グループが沖縄県に出かけて調査・作成した観光教材を活用した実験的なモデル授業を展開することである。この授業では、中城南小学校から北に4kmに位置する世界遺産である中城城跡の児童による訪問見学も含まれている。

インバウンド観光をテーマにした沖縄観光の実態に特化した教材開発を行うために、研究分担を実態把握及び教材開発を主とする班(3名)とモデル授業構築班(2名)に分けて編成した。

## 3. 観光基礎教育の教材開発

本章では、教材開発を主とする班に属する中村、曾山、中嶋の3名による沖縄本島における地域調査報告を述べたい。

### 3.1 国際通りの形成と発展をテーマとした教材

沖縄県内の特色ある地域の1つとして、沖縄県の県庁所在地である那覇市の「国際通り」を取り上げた教材開発を行った。那覇市では、「国際通り」の周辺一帯が、

中心市街地として位置づけられている<sup>1)</sup>。また、那覇市を訪れた観光客を対象としたアンケート(2013年度実施)によると、回答者の59.1%が「国際通り」を訪れており、那覇市内で最も訪問率の高い観光対象となっていることが示されている<sup>2)</sup>。一方、那覇市民を対象とした意識調査(2010年度実施)の結果を見ると、「国際通り」の年間来訪回数が2回以下の回答者が44.2%を占めており<sup>3)</sup>、住民の来訪者が限られていることが伺える。県庁所在地の中心市街地でありながら、その来訪者の多くを観光客が占めているという点では、特色ある地域のひとつとして位置づけることができる。

#### 3.1.1 「国際通り」の概要

「国際通り」とは、沖縄県道39号線の一部であり、県庁前交差点から安里三叉路までの1.6km、幅員18mの直線道路である。1934年に首里の市街と那覇の旧市街を直線的に結ぶ県道として開通し、当時は「牧志街道」と呼ばれていた。那覇市の戦後復興は、旧市街が解放されなかったため、この道路を中心に進んでいった。庶民の手で進んだ復興の結果、1952年にはアメリカの記者に「奇跡の1マイル」と称されるまでとなった。「国際通り」という名の由来は、戦後当時流行していた映画館「アーニーパイル国際劇場」(1948年開館、1970年閉館、現在は那覇市ぶんかテンプス館)が通り沿いに存在したことにある。以後通称として広く定着していたが、1987年によく正式な名称となった。

最近の状況として次の4点を指摘できる。第1に、「国際通り」の一帯に観光客を対象とした土産品店・飲食店が立地するようになったことである(中村, 2006)。従来は住民を対象とした「最寄品」や「買回品」が多かったが(山本, 2003)、観光客数の増加、郊外の大店への住民の買い物の流出<sup>4)</sup>のために、空き店舗が発生し、その跡地に観光客向けの店舗が入居するようになった。第2に、大型ショッピングセンターの閉店と観光型店舗への転換である。最近でも、「那覇OPA」が2013年7月に、「沖縄三越」が2014年9月に閉鎖した。旧「那覇OPA」の跡地は「ドン・キホーテ国際通り店」(2013年11月開業)、旧「沖縄三越」の跡地は「HAPINAHA」(2015年3月開業)と、ともに観光客を主たるターゲットとした商業施設に転換した。第3に、再開発・再整備が進んでいることである。例えば、2000年代以降には、電線地中化、歩道拡幅無線LAN環境の整備などが進められたほか、2011年には牧志駅周辺の再開発事業が完了し

「さいおんスクエア」として新たに開業した。第4に、イベントの拠点となっていることである。1995年からは毎年8月に「一万人のエイサー踊り隊」が開催されているほか、2007年2月からは毎週日曜日の午後は「トランジットマイル」と銘打って車両の通行が禁止され、様々なイベントが展開されている。

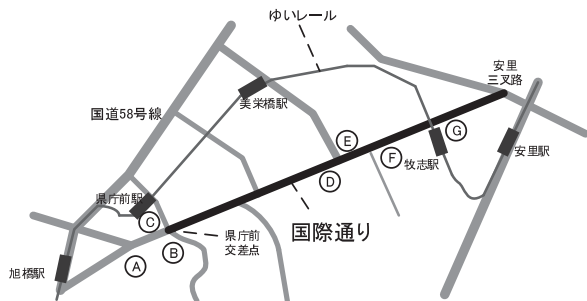


図1 国際通りの概略図

A：那覇市役所 B：沖縄県庁 C：パレットくもじ  
D：ドン・キホーテ(旧OPA) E：HAPINAHA(旧三越)  
F：那覇市ぶんかテンブス館 G：さいおんスクエア

### 3.1.2 教材の構成と学習内容

小学校3・4年次の社会科学習指導要領の内容を踏まえ、児童に、「国際通り」について次の点を学んでもらうことを意図した教材を開発した。全体構成は表2に提示したとおりである。

第1に、「国際通り」がどのような場所であるのかを知ることである。ここでは、「国際通り」が、①那覇市の中心にある1.6kmの直線道路であること、②那覇市の戦後の復興がはじまった場所であること、③現在は観光客対象のみやげ品店、飲食店がたくさんある場所であること、④住民にとっては、日常の買い物にはあまり行

かない場所となってしまったこと、を理解してもらうことを目指す教材を作成した。ここでは、統計データを基にしたグラフを作成し、そこから特徴を読み取ることをできるように配慮した(図2)。

第2に、「国際通り」がなぜ現在のようなみやげ品を中心とした商店街になったのかを考えることである。ここでは、①米軍基地の返還で発生した、まとまった大きな土地を使用した大型のショッピングセンターができたこと、②自家用車が普及し、住民は移動や駐車に便利な大型ショッピングセンターを利用するようになったこと、③そのため、那覇市中心部の「国際通り」からは地元の住民を対象とした店舗が撤退し、その空いた場所に観光客の土産品店等が入居するようになったこと、④沖縄県への観光客数の増加、ならびに国際通り周辺の宿泊施設の増加とあわせて観光客を対象とする店舗が立ち並ぶ通りへと変化していったこと、を理解できるように配慮した教材を作成した。この教材を用いた学びを通して、「国際通り」の観光地化と地元住民の生活の変化は決して無関係なものではないことを認識してもらえらるものと期待する。教材作成にあたっては、地図を使用し、「国際通り」と大型ショッピングセンター、道路の位置関係を確認できるようにした(図3)。

第3に、ここ数年の沖縄県には多くの外国人の観光客が訪れていることを通して、外国との関わりを考えていくことである。ここでは、①沖縄県を訪れる外国人の人数、②那覇空港からの直行便がある台湾、韓国、香港、中国からの外国人来訪者が多いことを数字で示した上で、③外国人観光客の増加を受けて「国際通り」においても、飲食店が外国語のメニューを用意したり、外国人向けの土産品店が登場したりするようになったこと、④



写真1 国際通り(通常時)



写真2 国際通り(トランジットマイル開催時)

観光案内所が外国語の地図等を配布していること、を把握してもらうことを意図した教材を作成した。さらに、小学校の社会科学習指導要領を踏まえ、具体的な国・地域を提示する際に、国旗を同時に示せるように配慮した教材とした(図4)。

第4に、「国際通り」が今後どうなってほしいのかを考えることである。この部分については、上記1~3の学習内容を踏まえて、児童が話し合い、意見を発表することを想定している。なお、この点に対応する教材作成を行っていない。

なお、全体を共通して、発問を行い(図5)、その上で具体的な資料を提示する方針で作成した。

### 3.1.3 想定する教材の活用

教材は、表2で示した「授業で学ぶこと」の全項目を使用するだけでなく、使用可能時間数や授業時の展開の仕方に応じて、各項目をパーツとして組み合わせて利

用できるように作成した。つまり、授業を展開する教師側は、各自の展開したい内容にあわせて、「パーツ」を取捨選択し、指導案を組み立てることが可能となっている。例えば、「国際通り」が現在の姿になったことを知る目的であれば、作成教材タイトルのうち「学習5：沖縄を訪れる外国人観光客」を割愛して授業を展開すればよい。一方、「国際通り」と海外との関わりというテーマで授業を展開するのであれば、「学習4：なぜ郊外に大型ショッピングセンターができたのか？」を外して授業を構成することができる。

### 3.2 読谷村民泊を介した修学旅行教材

本節では、曾山が試作したパワーポイント教材「くらしをまなぶ沖縄観光」について、教材の構成とそのねらい、本教材と深く関わる「民家体験泊事業」について言及し、その背景としてのオールタナティブ・ツーリズム

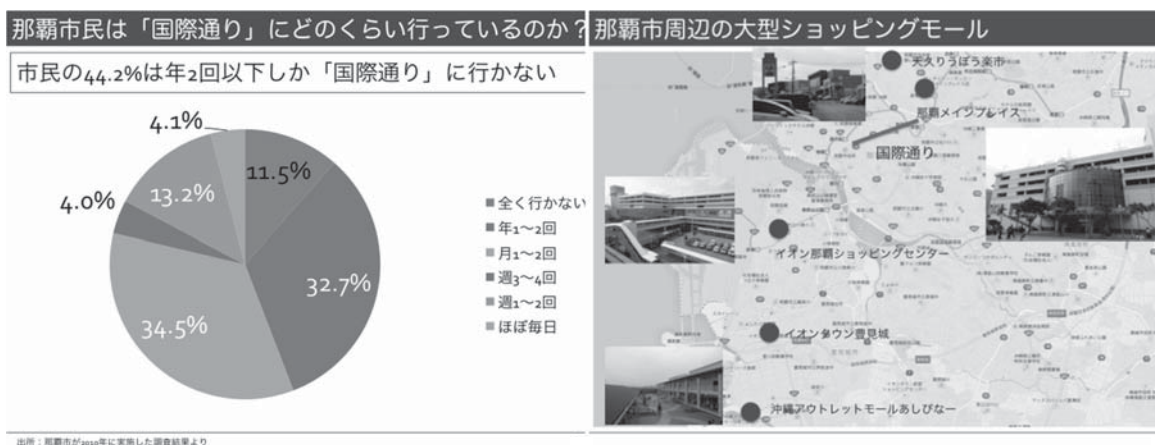


図2 作成教材例(その1)



図3 作成教材例(その2)

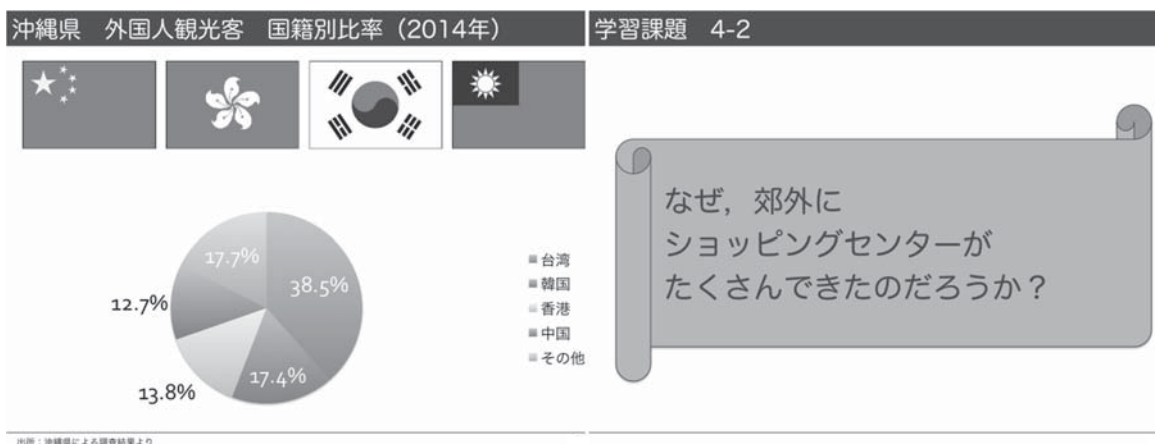


図4 作成教材例(その3)

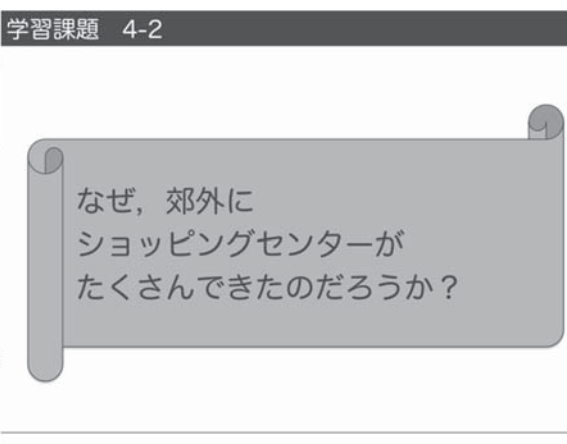


図5 作成教材例(その4)

表2 学習内容と作成教材

学習内容	作成教材タイトル
1. 「国際通り」がどのような場所であるのかを知る	学習1：普通の買い物と「国際通り」（スライド12枚）
	1-1 沖縄の人たちはふだんどこに買い物に行っているのだろうか？
	1-2 那覇市の「国際通り」に行ったことがありますか？
	1-3 行ったことがある人へ：どんなところですか？
	1-4 行ったことがない人へ：なぜ行かないのですか？
	学習2：観光客とおみやげ品（スライド9枚）
	2-1 観光客はどのくらいのおみやげ品を買っていますか？
	2-2 観光客はどのようなおみやげを買っていますか？
	2-3 観光客はどこでおみやげを買っていますか？
	2-4 なぜ、観光客はおみやげを買うのでしょうか？
2. 「国際通り」がなぜ現在のようなおみやげ品を中心とした商店街になったのかを考える	学習3：「国際通り」ってどんなところでしょうか？（スライド20枚）
	3-1 「国際通り」という名称の由来はなんなのでしょうか？
	3-2 観光客は「国際通り」をどう思っているのでしょうか？
	3-3 「国際通り」はなぜ土産品店やレストランばかりになってしまったのでしょうか？
	学習4：なぜ郊外に大型ショッピングセンターができたのか？（スライド10枚）
	4-1 沖縄にある大きなショッピングセンターの名前をあげてみよう！
4-2 なぜ、郊外にショッピングセンターがたくさんできたのだろうか？	
3. 「国際通り」に外国人の観光客がたくさん来ていることを知る	学習5：沖縄を訪れる外国人観光客（スライド15枚）
	5-1 沖縄に来る外国人はどこから来ているのだろうか？
	5-2 外国人の観光客のために「国際通り」や土産品店では何をしているのだろうか？
4. 国際通りの今後を考える	

(alternative tourism) (代替的観光) について述べたい。

本教材は、沖縄本島の小学校中学年生を対象にした社会科学教材である。沖縄観光にはさまざまな切り口があり、沖縄観光を題材としたさまざまな学びが可能であるが、本教材は、生徒に自分たちの暮らしと観光の関係について気づかせ、新たな沖縄観光について考えさせるきっかけとなることを目的としている。それではまず、本教材の概要について述べたい。

### 3.2.1 教材の概要

「1. 今日の授業で学ぶこと」では、授業の目的について提示する。ここでは、リピーターが大半である現在の沖縄観光において、観光客はどのような観光活動を行うのか。そして、授業の導入として、沖縄の暮らしのなかに観光客に関心をもってもらえるようなものが存在するのか、という問題提起を行う。つぎに「2. 民家にとまる外国人」では、東京において、最近話題になっている外国人観光客が一般民家に宿泊するという現象を紹介

し、「普通の日本人」の暮らしを体験することの観光的な意義について考え、沖縄観光の問題へ展開していく。

「3. 沖縄観光の場合」では、まず、沖縄観光における「おすすめの場所」を写真の中から選ばせる。それは次のような写真からである。①戦跡(旧海軍司令部壕)②大型スーパーに陳列されるポークの缶詰③勝連城跡④ハブ注意の立て札⑤首里城⑥マンション⑦住宅⑧美ら海水族館である。つぎに沖縄の観光客におけるリピーターの割合(82%)の高さとリピーターの求める観光対象について考えさせる。例えば、ハブとマンガースについて、観光客向けの「ハブとマンガースのショー」と「ハブに注意」の立て札を対照させて、沖縄の生活とハブに対する観光客の感興について考える。

同様に現代の沖縄の食生活について「ポーク」の広範な普及と、沖縄独特のデザインのマンションや住宅に対する観光客の視線についても提示する。「4. 修学旅行と民家体験泊」では、日常生活文化を素材とした観光の事例として読谷村、伊江村、恩納村など沖縄各地で取

り組まれている民家体験泊事業について読谷村の事例を中心に紹介する。

### 3.2.2 「民家体験泊」について

「民家体験泊」とは何らかの生業を営む一般家庭に修学旅行生などが滞在し、滞在家庭の人々と交流しながら生業や生活文化を体験する観光形態である。90年代後半から、全国で歴史や文化、自然などの地域資源を活用した「体験プログラム」をつくり、域外から観光者を呼び込んで交流人口を増やそうという試みが行われるようになった。近年国内観光が低迷を続けるなかで、地域資源を活用した地域主導型の新しい観光形態として注目されているが、読谷村、伊江村、恩納村などの取り組みはこうした試みの一つである。

バブル経済崩壊以降、日本では低迷する観光地に観光者を呼び込むために、マスツーリズムに替わるあらたな観光形態が要請されるようになった。マスツーリズムの限界はマスツーリズムの先進地である欧米において日本に先行する形で1980年代頃から指摘され始め、エコツーリズムやグリーンツーリズム、ヘリテージツーリズムなどがマスツーリズムの代替案として生まれた。それがこうした新たな観光スタイルがオルタナティブ・ツー

リズムと総称されるようになった所以である。オルタナティブ・ツーリズムの用語は1980年代の後半から普及しはじめ、1990年代に入ると観光研究のキーワードとして盛んに用いられるようになる。近年では、サステイナブル・ツーリズム (sustainable tourism) の用語がより一般的に用いられるようになり以前ほど使われなくなったが、オルタナティブ・ツーリズムは今でも現代観光をとらえる重要な視座であり、とくに沖縄における民家体験泊の分析には有効な視点であると思われる。そこでオルタナティブ・ツーリズムの特徴を簡単に整理しておく(安村克己「オルタナティブ・ツーリズム」(香川真編『観光学事典』) 木楽舎 2007年)。

オルタナティブ・ツーリズムの特徴は、第1に地域主導である点にある。マスツーリズムにおいては、旅行は消費者のために都市部の旅行会社によって手配されあるいは主催・催行される。旅行会社にとって地域は旅行商品を生産するパーツの仕入先に過ぎず、そうすると主導権をもつのは地域ではなく都市部の観光産業ということになる。その点オルタナティブ・ツーリズムでは、地域の自治体、観光協会、地元企業、住民団体、NPOなどが企画・運営を行うことが多いために、観光事業は地域主導で推進されやすい。ただし、今日の観光事業ではマスとしての送客を期待するためには、旅行会社との結びつきを否定することは難しく、地域主導型の観光では旅行会社の役割をどのように規定するかが問題になる。



写真3 「ハブに注意」の立て札



写真4 「よみたん民泊」の離村式

特徴の第2点であるが、入込みや経済効果などの量的な拡大を必ずしも問題にしないということである。もちろんある観光事業が継続するためには安定した経済効果が不可欠であるが、そこには入込みや観光消費の増大をめざす拡大志向の発想はなく、既存の地域資源や地域の総合力に見合った数の観光者をリピートして呼び込むことが前提となる。またそうであればこそ、旅行会社へ送客を過度に頼ることはなく、地域主導の姿勢を保持することができる。

第3に環境に対する負荷が低い点である。オルタナティブ・ツーリズムは外部から大量の観光者を呼び込むことがないために、その地域の自然環境、生活環境に対する影響を最小限に抑えることが可能になる。また施設建設などの観光開発をほとんど伴わないことも環境に対する低負荷につながっている。第4に観光者と受け入れ側との関係にも特徴がある。一般にマストツーリズムでは観光者と受け入れ側はサービスの受け手と送り手という関係でとらえられ、両者の接触は重要な観光活動とは考えられていない。それに対して、オルタナティブ・ツーリズムでは両者の関係は「交流」や「ホスピタリティ」という概念で説明されることが多く、その接触は観光活動の中心的な位置を占める。

さて、こうしたオルタナティブ・ツーリズムの特徴をほとんど具えているように思われるのが、「民家体験泊」であり、沖縄の暮らし＝生活文化を活用することによって、新たな観光のあり方を志向する優れた地域主体の事業であるといえる。現在は修学旅行のみならず、海外から研修活動に訪れる外国人が研修の一部にこのプログラムを取り入れるなど、国際交流などの領域においても実績をあげつつあるが、一方で修学旅行の受け入れが圧倒的に多いのも事実であり、「民家体験泊」の観光事業としてのより広範な方面への展開が今後期待される場所である。

本節ではパワーポイント教材「くらしをまなぶ沖縄観光」について、その概要と観光教育上の意義について述べ、その実践的な展開事例である「民家体験泊」について言及するとともに、その背後にあるオルタナティブ・ツーリズムの考え方を整理した。こうした新たな観光の可能性を授業において示すことは、沖縄の現代的な暮らし・生活文化に対する価値を生徒たちに認識させ、それが再び、沖縄における観光の重要性を考えさせる契機につながると思われる。今後の課題としては「民家体験泊」に代表されるような活動に、生徒たちを巻き込んでいく

実践的教育がどのように構築されていくかということであろう。

### 3.3 やんばるの環境を生かした教材

本節では、沖縄本島北部に残る「やんばる」と呼ばれる森林地域の持つ固有性や教材性に着目し、エコツーリズム教材の開発を試みた。

#### 3.3.1 エコツーリズムと沖縄県北部地域

近年、観光の多面的効果に注目が集まってきている。中でも、エコツーリズムは大規模な先行投資が必要なく、必ずしもプロの手を介さずとも地域に導入可能という特徴を有しており、民間の旅行業界に限らず国内外のNGO/NPOの取り組みも数多く見られるようになってきた。政府もニュー・ツーリズムの一つとして、また今後の観光振興策として注目している。地域活性化や地域振興策として実施されることも多く、その効果には各方面において期待感がある。

エコツーリズムには統一された明確な定義があるわけではないが、環境配慮型のツアーとして注目されることは多く、日本の民間ではNPO法人日本エコツーリズム協会（JES）が活発な普及活動を行っている。

JESによれば、エコツーリズムの定義は以下の通りである。

- ① 自然・歴史・文化など地域固有の資源を生かした観光を成立させること。
- ② 観光によってそれらの資源が損なわれることがないように、適切な管理に基づく保護・保全をはかること。
- ③ 地域資源の健全な存続による地域経済への波及効果が実現することをねらいとする、資源の保護＋観光業の成立＋地域振興の融合をめざす観光の考え方である。それにより、旅行者に魅力的な地域資源とのふれあいの機会が永続的に提供され、地域の暮らしが安定し、資源が守られていくことを目的とする。

また国際的な定義としては The international ecotourism society (TIES) によるものが代表的である。TIESによれば、エコツーリズムとは「自然保護と人々の生活の向上に貢献する、責任のある自然観光」であり、その原則は以下の通りである。

- 自然環境や地元の文化・生活に対する影響を最小限



に抑える。

- 環境と文化に関する理解を深め、地元の生活を尊重する。
- 環境保全のために、直接経済的な利益をもたらす。
- 地元の人々に、経済的な利益と権利を主張する力をもたらす。
- 旅先の国の政治、環境、そして社会的な情勢に対する敏感さを育てる。

これまでも既に沖縄県自体は観光資源が豊富な地域として、また人気のある旅行先として観光業界においてその地位を確立している。他方、自然資源を中心とした北部、およびその中でも「やんばる」と呼ばれる地域の観光資源はまだ十分に活用されているとは言い難く、観光の持つ多面的効果を鑑みれば、さらなる理解や発展に向けて活用できる余地を残した状態にある。

「やんばる」は沖縄県北部の国頭村、大宜味村、東村から成り、山がちな地形と広大な森林が広がっていることから「山原（やんばる）」と呼ばれている（環境省、2008）。その特徴的な地形や気候から、希少生物が多く生息し豊かな生態系が残る地域である。また、地史、植生、人々の暮らしに至るまで、固有の文化・伝統を維持する地域でもあるため、エコツーリズムの適地と考えられる。実際、豊かな森林資源を活用した、環境教育のためのセンター「やんばる学びの森」が設置されており、インタープリター（自然解説員）とともに森林内を学びながら散策できるネイチャートレイルがあり（写真5・6）、観光資源としてだけでなく教育的側面からもその活用が期待できる。

こうした地域固有の資源をいかに持続可能な形で活用してゆくかが、地域振興、観光振興、環境保全の観点か

ら重要であり、先述の定義に添う形でエコツーリズムが推進されれば、従来の観光上の魅力に加え新しい魅力の発信にもなり、その地域効果を大きくすることができると考えられる。

### 3.3.2 本研究の意義と授業教材開発

地方で取り組みがなされるエコツーリズムの多くは、進行する過疎化や高齢化といった地域特有の問題解決がその第一義におかれることが多く、地域の有する資源（宝）を掘り起こす作業からスタートをするケースが良くみられる（敷田、2008）。しかしながら、沖縄県のように既に観光地化が進み、修学旅行などでは目的地ランキングの第一位に位置する地域においても、いわゆる「宝さがし」が十分に行われているとは言い難い現状がある。将来的に地元の産業を支える子供たちが地元の「宝」を理解していないということは、地域振興を考える上で将来的に大きな損失にもつながりかねない。また、地域外からの来訪者（ゲスト）に対し、受け入れを担う地域住民（ホスト）が十分な知識を有していないとなれば、観光資源を支える幅広い意味での環境を健全な状態に担保することは難しいと同時に、観光産業で活躍する将来世代の人材育成という観点からも懸念が大きい。

こうした背景から、本研究では多様な観光資源を有する沖縄県北部地域をフィールドとし、観光基礎教育に資する教材開発を目的とした。具体的には、エコツーリズムについて学び、地域の魅力を児童自身が探し出し、それをういて北部地域で実施可能なエコツーリズムを立案することで（図6）児童の知識の習得・強化だけでなく言語力や問題解決能力、自主性や創造性、また地域への愛着などを養うことができるような教材づくりを目指し



写真5 ネイチャートレイル



写真6 やんばる学びの森

た。

教材は40枚のパワーポイントスライドで構成されている。内容の構成・指導のポイントは主に以下の通りである。

〈構成〉

- a 地域の魅力（みりょく）を知る — 北部って、どんなところ？ —
  - (ア) 沖縄の観光イメージ — 観光客は、どう思っているかな？
  - (イ) エコツーリズムって、知ってる？
  - (ウ) 沖縄県北部のこと
  - (エ) エコツーリズムの材料になるのは？  
フォトランゲージ（写真 [地域] の中にある魅力を探る作業）
  - (オ) やんばるの森
  - (カ) 島の成り立ち（歴史・気候）
- b やんばるのエコツーリズム
  - (ア) やんばるのエコツーリズム — 他県や世界に自慢できるものって何？
  - (イ) やんばるの森の魅力
  - (ウ) 星空観察
  - (エ) いろいろな魅力（アトラクション）
- c 自分で旅を考える — 地域の宝探し
  - (ア) ツアーを作ってみよう
  - (イ) ツアー名を考えてみよう（旅のテーマ）
- d 問題検討
  - (ア) どんな問題が起こりそう？
  - (イ) どうしたらいい？
- e まとめ・ふりかえり — 地球にやさしい旅をしよう

### 3.3.3 小括

エコツーリズムは、地域社会に対し環境的利益と経済的利益を生み出し、地域を発展させるツールとして機能するとよく言われる。本論で述べたJESの定義にもあるように、エコツーリズムは「地域の暮らしが安定し、資源が守られていく」ことに効果を大きく発揮できる。これらの利益はもちろん重要なのであるが、エコツーリズムを実施する効用としてはもう一点主張しておきたいことがある。それはエコツーリズム・プログラムの実施段階だけでなく、プログラム作成過程における効用である。

今回の教材開発を通じ、観光基礎教育教材を活用することで得られる効果として、「責任ある次世代の育成」を外すことはできないだろう。TIESが長年にわたり主張するエコツーリズムのあり方として「responsible travel（責任のある観光）」という概念がある。結局のところ、エコツーリズムを含む様々な旅・観光により生み出されるメリットは、資源担保、すなわち「sustainability（持続可能性）」が維持されていることが前提にあり、またそのためにはホスト・ゲストの別なく、関与する多様なステークホルダーがその立場における「責任」を果たすことが不可欠である。そして、そこから得られる利益を将来にわたり保障していくことを目指すとすれば、当然のことながら、資源の普遍的価値を維持するための工夫が必要となり、世代内公平性だけでなく世代間公平性が必要な要件となる。

このような観点からすれば、観光を用いた教育を実施し、その資源の有用性や成り立ち、或いは関係性といったものを次世代が理解していくことは極めて重要であると考えられ、エコツーリズムはその点に資することが可

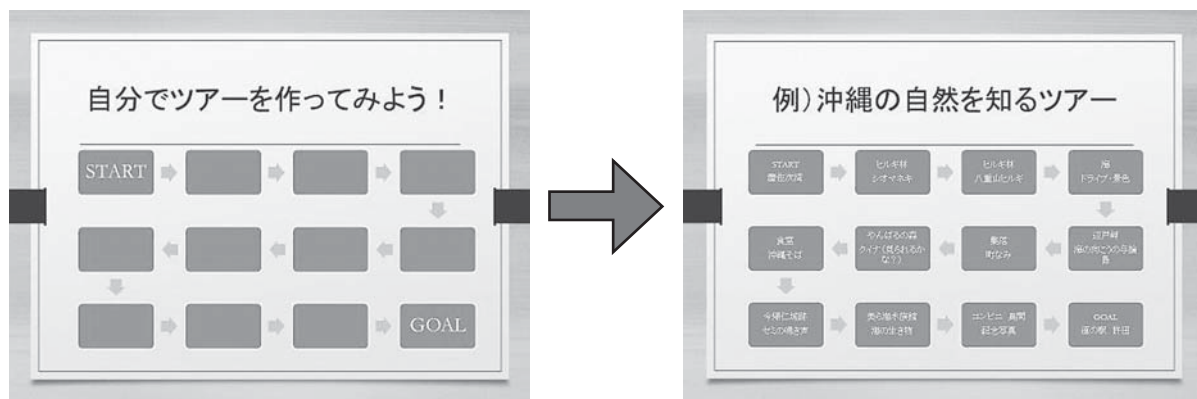


図6 ツアー作り

(出所：中嶋作成教材PPTより抜粋)

表3 中嶋が作成した教材案 (PPTスライド要点)

スライド番号	テーマ・内容	指導上のポイント・留意点
2-4	沖縄旅行のイメージ	・観光客の考える沖縄イメージを探る
		・沖縄県来訪者数を知る
		・従来のイメージ以外に多くの魅力があることを想起できるように誘導する
5-7	エコツーリズム／沖縄県北部	・エコツーリズムとは何かを理解する (イメージについて意見聴取)
		・北部の基本的な魅力を知る (訪問経験, 行きたい場所, 見たいものの有無を確認)
8-18	エコツーリズムの材料	・写真を用いて沖縄の観光地や観光資源になるものを確認する
		・名所だけでなく, 各地の地理・歴史や文化的背景, 生物相などの理解を深める
19-23	やんばるの森	・写真を用いて天然記念物や固有種・希少種について知る
		・「やんばる」とは何かを知る (県内他地域に興味・関心を持たせるよう誘導)
24-25	島の成り立ち	・地理的理解を深め, 固有種と森の関係を理解する
26-29	やんばるのエコツーリズム	・やんばる特有の魅力を探る
30-32	やんばるの森の魅力	・他県や世界に自慢できるものを考える
33-35	星空観察・その他の魅力	・自然資源以外の魅力の可能性を考える
36	自分で旅を考える	・地域の「宝物」を考える
37-38	ツアー作り	・旅のテーマを決め, ストーリーや地理を考慮したツアーを考えてみる (地域の「宝物」を用いて旅の流れを考える)
39	問題検討	・楽しい旅先に観光客が多く来たらどうなるかを考える (楽しいだけで終わらない)
		・問題を想起し解決策を考える
40	まとめ	・大切な資源を守るために必要なことを探る (意見聴取)

能なツールとしても機能していると言える。こうした社会の時勢に即した必要性を鑑み, エコツーリズム実施の意義や効用を拡大するためにも, 今後さらなる研究成果の蓄積が進められるべきであろう。

#### 4. 小学校からの観光基礎教育のモデル授業

##### 4.1 沖縄県公立小学校における授業

「今日, 五, 六校時に寺本先生が観光の勉強を教えてくださいました。五校時は観光で人気 No. 1 の都道府県がどこか勉強しました。その勉強で No. 1 は沖縄県とわかりました。No. 2 は京都府, No. 3 は北海道とわかりました。ぼくは, 予想が静岡だったので予想が外れたけど, 自分の住んでいる沖縄が No. 1 だったのでよかったなと思いました。六校時は観光客が喜ぶ新しい楽しみ方をカードで考える勉強をしました。ぼくは, この勉強をして思ったことは, カードに絵が書いてあるからわかりやすいなと思いました。ぼくは, 観光がいろんな人がいろんな所

へ行って国の文化, 食べ物, 列記し, 自然を体験しているからとても楽しいんだなと思いました。(4年男子)」「私が一番心にのこったことはカードを使う勉強をすることです。私は美しいビーチをながめて風景のスケッチをすると書きました。あと一つ心に残ったことがあります。それは沖縄は観光で1位ということがはじめて知りました。私は, 自分の住んでいる沖縄県が1位なのでとてもびっくりしました。沖縄県は, 自然や文化などたくさんあることがわかりました。寺本先生が作ったカードは国語とかでも使いたいです。教えてくれてありがとうございました。(4年女子)」

この二つの作文は, 寺本が授業者となり, 沖縄県の児童に対し初めて手製のカード教材を活用して試みた観光授業の直後に綴られたものである。自県のよさを見直し, 新しい観光客が楽しめるフレーズを26枚の絵カードを参考に考え合った喜びに満ちている。この試みは平成26年, 沖縄中城村中城南小学校第4学年を舞台に10月から11月にかけて1クラス8時間(2クラス計16時間)かけて展開した観光基礎教育のモデル授業のひとつまで

ある。本稿では、細切れで平板になりがちな単元「わたしたちの県のように」を観光のアンクルから大きく組み替えることで問題解決学習として魅力的に改善する提案を試みたい。

我が国は人口減少社会に突入し、地方はとりわけ高齢化と過疎化が著しい。経済は活力を失い深刻化しつつある。しかし、問題解決の手段がないわけではない。広義の「観光」が有効需要を喚起する。大都市と人口減少県同士が交流し、定住促進も果たさなくてはならない。いわゆる着地型観光をさらに活性化させ、内外からの観光客を招く必要がある。この動きを地方で自律的に推進できる人材は、今日の前に学んでいる子どもたちである。しかし、子どもたちは自県のよさと弱点をどれだけ知っているのだろうか。見ていて観（視）えていない資源があるのではないか。『教育出版』3・4年下の社会科教科書にも単元「わたしたちの県のまちづくり」（約25～27時間完了）があるが、単純に自県の地理的特色について地形や交通、産業等と項目別に学んだり、自然や伝統を生かした地域の紹介にとどまっていたは地域人材は育ちにくい。この単元を観光単元として組み替えていき、地域の観光資源化を志向した楽しい学習に指導の転換を図らなくては地方創生は果たせないのではないか。

#### 4.2 研究協力校と沖縄県の小学校社会科

ご協力頂いた学級は沖縄県中城村立中城南小学校（大城盛文校長、児童数463人）第4学年2クラスである。第1次は2時間連続で学習問題「どうして沖縄県が観光で人気のNo.1の県になれたのだろうか。」を追究した。そのときの指導案は次頁の表である。

##### ① 指導案

授業のねらい：沖縄県は観光で人気No.1であることを知り、その理由を考え合いながら、沖縄観光がどんな魅力に富んでいるか、観光客は沖縄に何を楽しみに来沖しているのかを考え、自分たちにも新しい滞在プログラムが立案できることを知ることで、観光業や観光の意味について理解を深める。

##### ② ビギナーとリピーター

沖縄県で使用されている観光副読本の中に沖縄を観光で訪れるビギナーとリピーターの推移を示した棒グラフが掲載されている。既に、8割に近い観光客がリピーターであり、その目的は観光地巡りや沖縄料理を楽しむ、マリッジ、ショッピングなどが上位4位を占めてい

るものの、第5位に保養・休養が24%もあると表示されている。「何万円もかけてわざわざ休みに沖縄にやってくるわけは何だろう？」というのが子どもたちの素朴な疑問である。よほど、沖縄に魅力がなければ観光客は何度もやってくるわけがない。いったい、どんな魅力が沖縄にはあるのだろうか、と問いが立ち上がってくるのである。そこで授業では、自然・食・歴史・文化・イベント・しせつの6つの窓口を示して、それぞれの窓口にどのような観光地や観光資源があるのかを確かめさせた。観光という目的的な行動が観光資源を同時に享受する行為となり、その結果、観光地が生まれてくる。観光という営みの本質に気付かせるきっかけとなった。

#### 4.3 開発したイラストカードの効果

2時間目の授業で初めて今回の授業のために寺本が開発した26枚の観光客が楽しめる行動を示した絵カードを提示した。この絵カードは楽しい鳥のキャラクターが観光を楽しんでいる様子を描いたもので、動詞や形容動詞で表現されている。これに具体的な観光地を接合して、例えば「写真を撮る」と「古民家でそばを食べる」という絵カードを手にして、観光地である首里城と合わせて、「首里城で写真を撮って、その後で近くの古民家で沖縄そばを食べる。」などといった観光客が楽しめる行動を言葉で表現させるのである。この作業を絵カードを前にして6人1グループで行った。

グループ内で一番よかった案を1つに絞らせて黒板に書き出すように促した結果、写真9のようなアイデアが案出できた。

一例をあげれば「沖縄ワールドで歩いて楽しみながら、焼き物のたいけんをして、琉球古民家で沖縄そばを食べる」という観光行動を考え出した。こうした、観光客の立場に立って楽しみ方を考え合う機会は、ホスピタリティ教育の基本にもつながり、同時に沖縄らしさをいかに演出し、観光客に楽しんでもらうかを考える企画能力の開発にもつながる。

授業はその後、世界遺産中城城を取り上げ、実際に見学・調査させ写真に石垣の美しさや城の要所を撮影させた。さらに、観光客に城の価値を分かりやすく紹介するコラージュ作品の製作へと続いていった。観光は社会科が主導できる内容ではあるが、時間が足りない。そこで社会科と総合的な学習の時間の合体で単元を組みたい。観光の学びは、地域素材を扱い現実感があり、総合がね

## 社会科指導案（1時間目）

	学習活動	指導上の留意点
導入	1 持っている地図帳を開いて47都道府県の中で観光人気No.1の都道府県はどこか予想する。 ・東京が1位と思う。 ・北海道ではないか。 ・ひょっとして沖縄県？	・予想した都道府県名を出した後、意見の根拠となる自分の考えを引き出す。 ・総合1位である資料を貼る。 ・『めんそーれー観光学習』の該当ページを開かせる。おおよその掲載ページを示してその中で探すように促す。
展開	2 沖縄県が総合で第1位の人気であることを知り、その理由を考える。 ・海や空が綺麗だから？ ・水族館や首里城に来ている。 ・結婚式で来ているのでは。 ・保養に来ている？	・隣の人と話し合っ探してもいい。 ・各視点ごとにグループから出てきた意見を大まかに教師が整理する。 ・『観光学習』p.17に掲載のグラフ（観光客の滞在中の活動）に着目するように促し、自分たちの予想と照らし合わせるよう促す。
まとめ	3 観光客は滞在中、どんな目的で観光するのかを考える。 4 6つの観光資源の視点をヒントに沖縄県が人気No.1である理由をグループで考える。その視点が決め手？ 5 6つの視点の内、どれが最も重要なのか自分の班の考えを紹介する。	・6つの視点を書いたカードを黒板に貼り、児童には班に1枚ワークシートを配布し記入させる。 ・6つの観光資源を分類する視点の内、どの視点が最も沖縄県にとって重要かを絞り込ませる。

## 社会科指導案（2時間目）

	学習活動	指導上の留意点
導入	1 沖縄本島の拡大図を使い、沖縄本島で県外から訪れた観光客が楽しむ新しい観光の滞在プログラムを作る。	・沖縄本島にある主な観光地名を列記する。 ・『めんそーれー観光学習』の該当ページを開かせる。おおよその掲載ページを示してその中で見つけるように促す。
展開	2 「観光地+動詞」の組み合わせで観光客の楽しみ方を考え、ノートに各自2~3つ書き出す。 3 班で自分の考えを紹介し合う。 4 班の世話役の子どもが一押し楽しみ方を1案選択する。 5 班の代表者が黒板の前に出てきて案を黒板に書き出す。	・隣の人と話し合っ探してもいい。 ・最低、2案考えるように勧める。 ・友だちのアイデアを喜んで聞くためにも相づちと感嘆の声をあげるように勧める。
まとめ	6 皆で考えたアイデアの感想を述べ合う。	・楽しく話し合いながら決めていく。 ・班ごとの記入欄を板書で準備する。 ・実現できそうなアイデアを褒める。



写真7 沖縄観光が人気No.1であるわけを考えた後で、「観光客の楽しみは何だろう。」を書き出している様子

らいとする企画力・提案性も盛り込めるからだ。今回、沖縄県の4年生で試みたのは地元に残るグスク（世界遺産・中城城）の価値に気付かせ、観光資源としてさらに活用するためのアイデアを紡ぎ出す授業となった。まず最初に、同じ世界遺産である姫路城との比較を行い、視野を広げた。中城城は600年も前に造られ保存状態が良い事実、曲線の石組が日本一美しい城であること、護佐丸という武将が築城したことを扱い、現地を見学学習する体験も取り入れた。以下、出前授業の様子を写真10～14に示そう。

授業後、「沖縄県や中城村に観光客を呼び込むには」と題する作文を書いてもらった。「私は、もっと観光客が来てくれるにはどうしたらいいか考えました。一つ目は、中城村の人が中城城跡についての事がわからない人がたくさんいます。でも、私たちがわかったの知らない人たちに中城城跡のよさをいっぱい伝えたい人たちがくると思います。例えば、中城城跡だけにしかない石の積み方が三種類があるとか。セメントをつかわずに石を組み合わせてるといことが観光客には信じられないと思います。しかも、中城城跡は全体が石積みで囲まれていてとってもくふうされています。そして、戦いにも強いと思いました。(中略)クイズラリーをして楽しく城跡を回ると観光客が来ると思います(4年女子)」学習前には無関心であった児童が、地元の世界遺産の価値に気付き、「しげん」として活かす意識に転換できた。

2クラス延べ16時間の出前授業であったが、子どもた

ちはふるさとにある世界遺産が今日まで600年もの間継続してきたことへの感謝とこれから自分たちが継承していきたいと願う責任感の芽を抱かせることに成功した。

さらに、今回の試みは地元新聞社（沖縄タイムスの記事）やNHK沖縄のニュース番組にも取り上げられた。

#### 4.4 「しげん化」で学び合う社会科授業の必要性

観光資源となる地域のよさは意外と見出しにくい。既に観光地として発展できている場合は、卓越した価値のある場所や施設、文化的装置、自然景観などが古くから存在しているから分かりやすい。例えば、有名な神社やレジャー施設、国立公園などである。しかし、これから個人旅行者が大半を占めてくる時代にあって従来の観光資源だけに頼ってでは地方の活性化は期待できない。農林水産業で生産される資源も見方を変えれば観光資源になり得る。観光農園や体験漁業などはその好例である。筆者が「しげん化」と呼んでいる学びは、地域資源の発掘や再認識の作業であり、同時に批判的思考も働かせつつ問題解決学習が成立する展開をイメージしている。子ども時代から持続可能な地域の発展を考えていこうとする習慣を身に付けさせ、提案能力の育成につなげたい。地域から資源を見出したり、見直したり、組み合わせたりする中で子どもたちは地域に自信と将来への希望を培えるようになるだろう。若年女性の半減で地方の自治体が消滅するとの推計に悲観するだけでなく、教育も地域



写真8 観光行動を示した26枚の絵カードを前に考え合う子どもたち

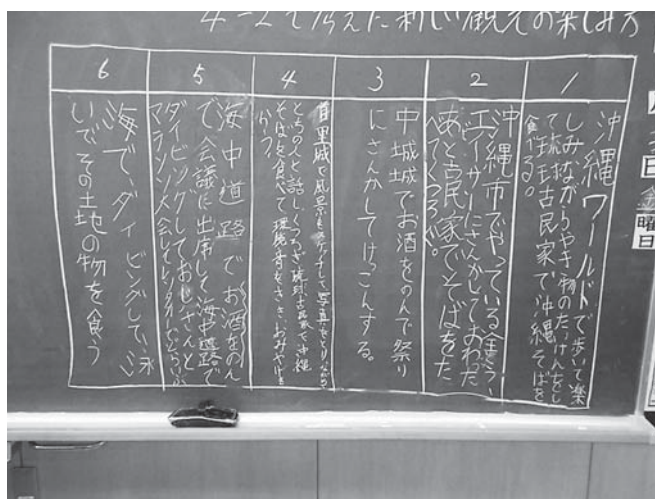


写真9 4年生が考えた観光客に楽しんでもらうアイデア

の持続性に寄与する使命がある。

初めて本格的な観光の授業を展開した。5年前に新宿区の公立小学校をお借りして同じく単元「わたしたちの東京都」を組み替えて八丈島と浅草の手づくりの観光パンフレットを作製させたこともあった。オーソドックスに県の地形や人口、交通、産業などを並列に扱う従来の

指導法と比べて、その時は格段と魅力的な授業が実現できたとは言えなかった。しかし、今回は観光の学びはかなりの手ごたえを感じた。子どもたち自身、観光を題材に学習することに積極性を見せ始めたからである。自分の住む県の観光の魅力を知った喜びに近い感覚を覚えたい。沖縄県は確かに観光で人気ダントツの



写真10 バスで移動中、城の見方も復習



写真11 ボランティアガイドさんの話を聴く



写真12 カメラを使って文化財を撮影



写真13 城壁の形をモチーフにコラージュ



写真14 使い切りカメラで中城城を撮影している子ども

県ではあるものの、どの県でも観光資源はある。今後、社会科でこそ観光学習が華を開くはずである。今、どうして観光の授業が小学校時代から必要かを真剣に考える時代に差しかかっている。

## 5. 小学校から進める観光基礎教育の可能性

### 5.1 沖縄県における実践から分かること

小学生から観光基礎教育を展開することの有効性は、子ども自身が自分の住む自治体の観光資源を見直すきっかけになることである。多くの子どもの場合、著名な観光地に多くの観光客がやってくる事実を知ってはいるものの、その理由を表面的に説明できるに過ぎない。観光客が何を目的として費用と日数をかけてやってくるのか、を真剣に考える機会を有していない。さらに、身近な地域に存在する世界遺産でさえ、地元の子どもの約半分が訪問していない実態もある。着地型観光が今後の展開で必須であるにも関わらず、地元の子どもさえ観光振興を念頭においておらず、自分の問題意識に引き寄せていない。持続可能な観光 (Sustainable Tourism) も今後、社会科 (地理) 教育が主導できるテーマである。一般にはエコツーリズムとも呼ばれているが、特にESDが「環境、経済、社会の面において持続可能な将来が実現できるような価値観と行動の変革をもたらすこと」(日本ユネスコ国内委員会) を重要視しているため、観光はその方法論としても有効な手段を提供するだろう。地域の自然や文化資源も観光の場に提供されて初めて持続可能性が高まる現実がある。伝統的な踊りが、観光資源化を経て変容していく姿も角度を変えれば、文化の創造とも言える。地域に残る自然を売ることも保護することも地元住民がその価値をどう考えるのか、観光客の価値観との関わりによって方向性が決まってくる。こういった現状を理解し、持続可能な観光開発の在り方を考える教育の教材開発をするべきである。関心の喚起を経て、環境の持続性への理解を深め、参加する態度や問題解決能力を育成する実践的な社会科教育が観光を題材に推進できるに違いない。大学の観光学部や教育学部はこうした教育の立ち上げに大きく寄与できるはずである。

### 5.2 アメリカ合衆国ミシガン州における観光基礎教育

共同研究メンバーの小林は、在外研究にて在米中で

あったため、当地において観光基礎教材の収集に当たってもらった。在外研究先は米国ミシガン州である。ミシガン州には47の大学があるが、学術総合大学として最も評価の高いミシガン大学 (University of Michigan) のあるアナーバー市 (Ann Arbor) では、大学と地域コミュニティが一体となった観光基礎教育が展開されている。

特徴的なのは、ミシガン大学自体がアナーバー市の中心的な観光資源として位置づけられており、学生および外部からの訪問者に対する案内と見学の体制が充実していることである。

大学のヒュットウェル・ビジターセンター (Huetwell Visitors Center) では常時、ミシガン大学生、大学入学希望者、一般市民および国際ゲストを対象とした学生のボランティアガイドによる大学の歴史的建造物をはじめとする諸施設をめぐるキャンパスツアーが行われている。ミシガン大学美術館 (University of Michigan Museum of Art) は無料で一般公開されており、18~19世紀のヨーロッパ、アメリカ絵画を中心とする常設展の他、月替わりの企画展が行われている。ミシガン大学は12の博物館を持っており (自然史博物館、考古学博物館など)、基本的にすべて一般公開である。また大学キャンパス内に数か所ある図書館での観光基礎教育も盛んで、筆者が訪問した2015年1月には、クラーク図書館にて江戸時代と明治期の日本の「名所図解」に関する企画展が行われ、図書館司書による丁寧なガイドツアーも実施されていた。

大学外の施設としては、アナーバー市内にNPO組織による「アナーバー地域ビジターセンター」(Ann Arbor Area Convention and Visitors Bureau) がある。ここではアナーバー市内および周辺地域の観光資源についての資料提供やガイドを行っているほか、会議センターも併設されている。

ノバイ市 (Novi) にある日本人補習校「デトロイトりんご会補習授業校」では、地域住民を対象とした日本についての観光教育の成果発表会が行われており、補習校と地域社会をつなぐ紐帯として機能している。



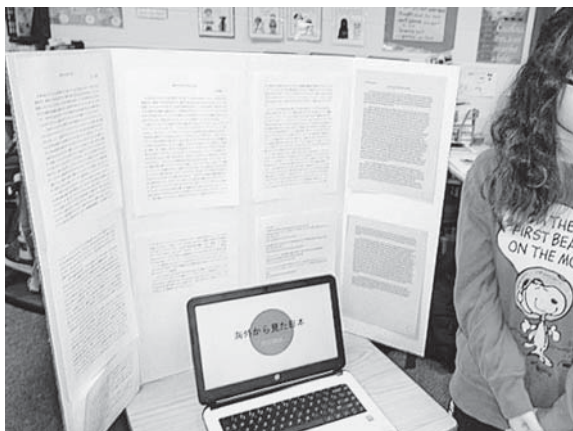


写真15 デトロイト日本人学校における観光学習「海外から見た日本」

## 6. おわりに

観光産業は裾野が広い産業である。宿泊業や交通産業だけでなく、特産品製造にかかわる農林水産業、トラベル情報をビジネス界に提供するITソリューションにまで至る膨大なセクターが関連してくる。ヘルスツーリズムやエコツーリズム、スポーツツーリズム等のニューツーリズムも想定すればその裾野を支える観光産業の人材育成は重要な教育課題となる。単に「おもてなし」の精神を涵養したり、自国文化に関する認識を深め、道案内したりする能力など観光客を受け入れる住民・国民としての基礎的な資質だけでなく、自分自身も国内外へ観光客として出かけていき、人生を旅行を通して積極的に愉しもうとする「確かな観光者」に成長することが期待されている。そのためには、幼い頃から観光を肯定的に捉える何らかの学びが必要である。社会科教育はその主導的な役割を果たす用意がある。外国語会話は重要であるが、単に会話能力を磨くだけでは、コミュニケーションは十分とは言えない。なぜなら、観光は、観光客の背景を理解する広汎な国際性と旅行という移動性の両面を内包した現代的な現象として認識する必要があるからだ。

折しも2015年7月18日に奈良教育大学にて開催された日本地理教育学会シンポジウムにおいて「世界遺産と地理教育」がテーマに設けられて論議された。寺本はその場において本共同研究の成果を発表した。観光というテーマが、観光地の持続可能な環境の在り方を考える上で、児童生徒に優れた環境との調和に関する課題を提示できるため、問題解決学習を基調とする社会科において

観光産業の在り方や地域の持続性をリアルに考察させる学習材になること、さらに世界遺産を地元の子どものとして継承し、保全に向けての責務を考えることの大切さが確認できた。

地域で生起する観光に対して積極的に扱える総合性を有していることが社会科教育の魅力や強みであることが再確認された。観光科が備わっている高等学校や専門学校における観光地理に類する教育内容だけで、その期待に応えることができるとは思っていない。裾野を広げなくては確かな観光者育成はおぼつかないであろう。もっと初等中等教育にまで観光を扱える場面を拓けていく必要がある。その具体的な戦略として、まず第一に、有名観光地を有する都道府県の小中学校において都道府県別の社会科副読本などを活用した観光の授業を「総合的な学習の時間」を活用して開始することである。既に沖縄県や宮崎県、和歌山県などにおいては観光副読本が作成されている。大学の教育学部や観光学部はその編集を手助けすることが十分可能である。

## 謝 辞

本研究は、平成26年4月～27年3月までの期間で行われた玉川大学学部間共同研究の助成金によって実施された。助成に対し、感謝申し上げたい。

## 注

- 1) 那覇市経済環境部商工振興課(2003)那覇市中心市街地活性化基本計画 II 中心市街地の概況, 那覇市, <<http://www.city.naha.okinawa.jp/out/seisaku/sigaiti/cs2.htm>> 2015年7月21日閲覧。
- 2) 那覇市経済観光部観光課(2014)平成25年度版那覇市の観光統計 観光客の声, 那覇市, 40-45, <<http://www.city.naha.okinawa.jp/cms/kakuka/kankou/kankoutokei/tokei25.pdf>> 2015年3月4日閲覧。
- 3) 那覇市企画財務部企画調整課(2011)平成22年度(第19回)那覇市民意識調査報告書, 那覇市, 48-49, <[http://www.city.naha.okinawa.jp/sisei/kaiken/y2011/m01/stuff/0126siryou\\_01.pdf](http://www.city.naha.okinawa.jp/sisei/kaiken/y2011/m01/stuff/0126siryou_01.pdf)> 2015年3月4日閲覧。
- 4) 例えば、1987年に返還された牧港住宅地区の跡地は那覇新都心となり、「天久りうぼう楽市」(2000年)、「サンエー那覇メインプレイス」(2002年)が開業した。那覇空軍・海軍補助施設は1986年に返還され、跡地には「ジャスコ那覇店(現:イオン那覇)」が1993年に開業した。

## 引用文献

- 中村哲（2006）「観光による中心市街地活性化の意義と限界：那覇市国際通りを事例として」『経済文化研究所紀要』11, 221-247.
- 山本耕三（2003）「沖縄県那覇市における中心市街地の機能変化：国際通りの場合」『熊本大学教育学部紀要』自然科学, 51, 57-66.
- 文部科学省（2009）現行学習指導要領・生きる力：小学校学習指導要領：第2章各教科 第2節社会, 文部科学省

## 参考文献

- ジョン・アーリ著, 加太宏邦訳（1998）『観光のまなざし—現代社会におけるレジャーと旅行』法政大学出版局, p. 289.
- 環境省那覇自然環境事務局（2008）『輝くやんばるの森—森と生き物たちのつながり』新星出版
- 敷田麻実（編著）（2008）『地域からのエコツーリズム—観光・交流による持続可能な地域づくり』学芸出版社
- 寺本潔（2015）沖縄県の小学校における観光基礎教育の授業モデル構築と教材開発に関する研究『論叢 玉川大学教育学部紀要 2014』pp. 73~85.